

ルソン海峡と南シナ海正面を重視 対中国包囲網を強化した米比バリカタン演習

樋口 譲次

4月22日に始まった米比合同軍事演習「バリカタン2024」は、約3週間にわたって実戦的かつ挑戦的な訓練が行われ5月10日をもって終了した。

バリカタン2024には、米比に加え、オーストラリア軍とフランス軍が初めて正式参加した。さらに、日本をはじめ、韓国、インド、ニュージーランド、カナダ、英国、ドイツ、マレーシア、ブルネイ、インドネシア、ベトナム、タイ、シンガポールの13か国がオブザーバー参加し、併せて17の同志国が多国間パートナーシップを強化した、南シナ海事態を巡る最大規模の演習となった。

本演習は、フィリピンの防衛態勢の範囲をセカンド・トーマス礁やスカボロー礁など南シナ海の島々を含む排他的経済水域（EEZ）、そしてルソン海峡などの最外縁領域に拡大することを目的とした、フィリピンの「包括的列島沿岸防衛構想（Comprehensive Archipelagic Coastal Defense Concept）」と称する新戦略に基づいて行われた。

これをもって、日本から台湾、フィリピンそしてボルネオ島へと続く第一列島線の防衛が一応連結された形となり、対中国包囲網が強化されたことが、本演習の最大の狙いであり成果ともいえよう。

同演習では、フィリピン及びその周辺海空において多領域にわたる訓練・演習が行われたが、その中で、注目すべき二つの訓練について概観してみよう。

○台湾有事における海峡封鎖を睨んだルソン海峡正面での防衛訓練

ルソン島の最北部のバタネス州のルソン海峡正面にあるバタネス島は、マニラよりも台北に近い。そのバタネス州全域に展開して、米陸軍・海兵隊及びフィリピン海兵隊は共同作戦能力の強化に向けた訓練を行った。

台湾からわずか138マイル（約500キロ）離れたフィリピン海軍前哨基地のある無人島マブリスには、海洋領域認識（maritime domain awareness）センサーを備えた米第3海兵沿岸連隊（MLR）の部隊が展開した。同島への米海兵隊の展開は初めてという。

また、米比海兵隊の合同沿岸偵察チームがマブリス島に近隣するイトバヤット島とバタン島に赴き、海洋領域感知ネットワークを構築した。

バタネス州最大の島であるバスコでは、米比海兵隊が同州最大の飛行場に前方燃料補給および再武装拠点を開設した。

ルソン海峡では、米豪比空軍による共同空襲作戦に関する訓練が行われた。

米陸軍の第1マルチドメイン任務部隊（MDTF、米ワシントン州）は、ルソン島北部の港と飛行場に高機動ロケット砲システム（HIMARS）を展開する急速浸透訓練を行った。

また、本演習には、MDTFの中距離ミサイル能力（MRC）システムが初めて持ち込まれた。同システムは、既存のNavy SM-6とUGM-109 Land Attack Missileを地上発射型に改修したもので、射程約1800キロあり、中国大陸の戦略要点を十分に攻撃する能力があることも注目点である。（マニラから広州市までの距離は約1250キロ）

これらは、中台兩岸関係の緊張の高まりを受けた訓練であることに間違いない。

台湾有事には、米比両軍が共同してルソン島北部を防衛するとともに、ルソン海峡、ひいてはバシー海峡を封鎖する訓練の一環と見られ、台湾とフィリピン間の間隙を塞ぎ、防衛を連結して中国海空軍の太平洋への進出を阻止する上で、極めて重要な戦略的目的の訓練であったと見ることができよう。

○南シナ海正面における初の対艦ミサイル実射訓練

バリカタン2024のクライマックスとなったのは、フィリピン海軍等が5月7日朝、海上攻撃訓練として、南シナ海で目標船舶を対艦巡航ミサイル等で撃沈した実射訓練である。

目標には、退役したタンカー「レイク・カリラヤ号」（中国製タンカー）が使われた。

実射に当たっては、米海軍のP-8 ポセイドン哨戒機や海兵隊のTPS-80 地上／航空任務指向レーダーセンサー、オーストラリア空軍のE-7A ウェッジテール早期警戒管制機など、空地のさまざまなプラットフォームから得られたデータ（目標情報）が統合調整センターで集約され、それが直ちに艦艇や航空機に送られて目標を射撃する統合射撃ネットワークが構成された。

フィリピン海軍初の誘導ミサイル搭載フリゲート「ホセ・リサル（Jose Rizal）」は、目標に向けてCスター対艦巡航ミサイルを発射した。同海軍の高速攻撃艇はスパイクミサイルを発射した。また、三沢米空軍基地を拠点とする第13戦闘飛行隊のF-16戦闘機が複数のJDAM（Joint Direct Attack Munition）精密誘導爆弾を投下した。

こうして、フィリピン標準時10時59分、レイク・カリラヤ号は2時間にわたって攻撃を受けた後、海中へと没した。なお、目標となったレイク・カリラヤ号は、訓練の機会を最大化するため、船体をできるだけ長く浮かせておくように工夫されていた模様である。

本訓練では、前述の通り、米豪比3軍間のセンサーから射撃装置までを統合したキルチェーンネットワーク（sensor-to-shooter kill-chain network）が運用され、南シナ海で初めて対艦ミサイル等による実射訓練が行われたものである。

中国のフィリピンの領土や海洋領域の侵犯のみならず、南シナ海の内海化、軍事的聖域化の動きを阻止する上で画期的な訓練であり、その意義は極めて大きく、今後の拡大的な実施が望まれる。

○日台比3か国を連結した「統合島嶼防衛構想」を推進せよ

第一列島線のどこかの一部でも中国軍によって突破され、占領支配されるようなことがあれば、日本のみならず米国にとっても死活的ダメージを被る。その意味で、フィリピンの戦略的価値は、益々重要性を増している。

それを踏まえ、4月12日にワシントンにおいて日米比の首脳会談が開催され、3か国で安全保障・防衛協力を強化する方向で合意された。

会談では、中国による南シナ海での攻撃的な行動や、東シナ海での一方的な現状変更の試みへの深刻な懸念を共有した上で、3か国の海上保安機関による合同訓練に加え、海域のパトロールを行うなど、海洋安全保障協力を強化していくことで一致した。

さらに、自衛隊と各国海軍の合同演習や、日米両国によるフィリピン軍の近代化支援といった防衛協力を推進していくことも確認された。

来年のバリカタン演習には、自衛隊が本格参加すると伝えられている。

このように日本は、フィリピンの安全保障・防衛の強化に協力するとともに、日米比3か国での戦略的トライアングルの推進に向け連携を強めることが殊の外重要である。

その重要性は、とりもなおさず日米台の関係にも当てはまることである。

日米比と同様の取組みを通じて、日米台3か国の安全保障・防衛面の連携メカニズムを構築することも喫緊かつ不可欠の課題であるからだ。

それは、米国との同盟・協力関係を通じて日台比3か国の防衛を連結し、切れ目のない強靱な「統合島嶼防衛構想」を推進する上で必須であり、中国の野望を絶つ最強かつ最優先の施策といえよう。